

がん社会 を診る

中川 恵一

2016年の自殺者数は2万1897人と、前年に比べて2128人(約8.9%)減り、22年ぶりに2万2000人を下回りました。1998年以来、14年連続して3万人を超える状況が続いていましたが、男性は7年連続、女性は5年連続で減っています。男性の自殺者は女性の約2.2倍で、年代別には40歳代が3739人と17%を占め、50代、60代、70代と続きます。

減っているとはいえ、日本はいまだに「自殺大国」です。厚生労働省の調査でも自殺死亡率(人口10万人当たりの自殺者数)は世界ワースト6位で、先進国では最悪のレベルです。

日本人の自殺原因で際立って多いのが健康問題です。2番目に多い経済問題の3.1倍にもなりますから、健康問題がいかに大きな影響があるか分かります。

がんを苦しめた自殺

健康問題で自殺する日本人の42%がうつ病を患っています。がん患者にはうつ病、適応障害が多いこともあり、がんと診断されてから1年以内の自殺率は一般の人の24倍にも達します。

日本より自殺率が低いスウェーデンでも、がんを診断されて1週間以内の自殺率は13倍というデータがあります。乳がんや前立腺がんといった治りやすいタイプに比べ、食道がん、肝臓がん、膵臓(すいぞう)がん、肺がんといった難治性のがんでとくに自殺率が高くなります。また、男性や高齢者でリスクが上がる傾向がみられます。

がんによる自殺は診断直後だけではありません。12〜14年度の患者を対象とした日本医療機能評価機構の調査では、精神科のベッドがない一般病院のうち、約2割にあたる83の病院で計107人が自殺していました。がん患者が52人と約半数を占め、46人は、がんによる痛みなどの症状の悪化がみられています。また、31人で「死にたい」など自殺に関連する発言があったといいます。

私もとてもつらい経験があります。20年近く前のことですが、直腸がんが背骨に転移してまひが起こった患者さんが病室で自らの命を絶ったのです。50代の消防士の方でしたが、緩和ケアやチームによる患者サポートに関心を持つきっかけになりました。この場を借りて、ご冥福を祈ります。合掌。



イラスト・中村 久美